

日本の全世帯のうち、子ども（児童）がいる世帯は、どのくらいの割合なのだろうか。2022年には、とうとう2割を切った。8割の世帯には、子ども（児童）がいないということになる。1980年代半ばには、4割を超えていたことを考えると驚くべき減少率である。

よく少子化という言葉が出てくる。子どもが減っていることはわかっていた。だが、具体的な数字を示されると、その現実に愕然とする。今や子どもがいる世帯は、かなりの少数派である。自分の子どもが小さいときには、子どもが集まるような場所によく行っていた。そのためだろうか、少子化の実感はなかった。現在も、幼稚園で仕事をするようになり、自然と小さい子どもたちに目がいく。すると、子どもが少ないという感覚はなくなる。

我が家も、子どもがいない8割の世帯の仲間入りを果たした。多数派に属することとなった。2022年の平均世帯人数は、2.25人である。3人家族であれば、平均を上回る状況である。日本の家族機能は、まずは量的に変化したと言える。同時に、質的にも変化してきている。

保育所や認定こども園もそうだが、幼稚園は、約2割の貴重な世帯を対象とした場所である。ある調査から、保護者の園への要望を見てみる。「集団生活のルールを教えてほしい」が92.8%で1位である。次に、「子どもに友だち付き合いが上手になるような働きかけをしてほしい」が90.7%で続く。自分が勤務する幼稚園では、この2つを実際に行っている。それも、担任の先生だけではなく、園全体がチームとなって取り組んでいる。

5軒に4軒は、子どもがいない世帯となると、今までのような家族としての機能は成り立たなくなるように思う。家族というと、一緒に住んでいるという大前提のようなものがあつた。しかし、現代では、一緒に住まない家族の方が主流となっている。同居していなくても、家族としての絆を大事にできるような方法やシステムが必要である。

最も小さな社会の単位が家族である。小さいが、一番大事なものでもある。子どもは、家族の中で育てられ、成長していく。家族の愛情を一身に受け、少しずつ人として備えるべきものを身につけていく。そして、やがては巣立っていく。

家族と一緒に住んでいようがいまいが、家族は家族である。たとえ、離れていようと、海外にいようと、大事な大事な存在である。そう考えると、家族としての量的な機能は変わってきたのかもしれないが、質的にはさほど変わっていないようにも感じる。いや、変わるべきものではない。子どもが少ない現代だからこそ、今まで以上に、家族としての機能を大切にしていきたい。